

## 貴重図書展示「絵で見る古典」

期間：2022年7月1日（金）～9月30日（金）  
 場所：中百舌鳥図書館 1階貴重図書展示ケース

<sup>げんじものがたり</sup>  
 おさな源氏物語 刊 五冊 寛文12年(1672)  
 野々口立圃作・画



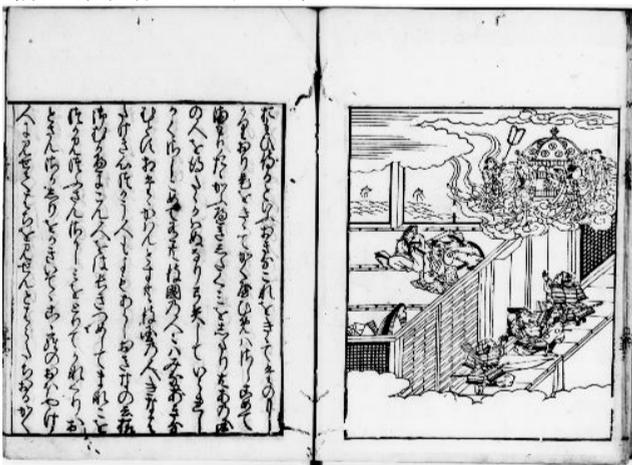
幼少婦女子のために『源氏物語』を要約したもの。同じ著者の『十帖源氏』をさらに簡略化している。寛文6年（1666）・同10年（1670）版などが知られるが、これは寛文12年（1672）の松会版。版本の絵に色を塗った丹緑本である。

<sup>にほんむかしばなし</sup>  
 Japanese Fairy Tales Series(日本昔噺) 刊 二十冊



日本昔噺の英訳。縮緬紙（縮緬のように細かく皺を寄せた和紙）に多色刷。長谷川武次郎が明治18年（1885）から発行しはじめたシリーズで、一話一冊、二十冊揃。明治期に來日した外国人が帰国する際のお土産として重宝がられた。

<sup>えいりたけとりものがたり</sup>  
 絵入竹取物語 刊 二冊



<sup>ましんたいへいき</sup>  
 麻疹太平記 刊 小一冊 江戸後期  
 歌川直政 歌川芳房画



滑稽本。「雑具魚鳥山海餅酒読切大合戦」と題した合綴の中に所収されており、ほかにも「魚貝英記餅酒合戦」「膳太平記餅酒噺」などがある。

せんめんたんごずかい  
扇面単語図解 楮紙扇面 銅版 明治6年(1873)



うたいほん まつかぜ  
謡絵本 松風 写一冊



外題には「謡曲 松風」とあるが、謡曲の『松風』をもとに奈良絵本風に仕立てたもの。江戸時代初期、寛永期の作例と見られる。写実的な絵もあるが、潮波み車などは舞台上で用いられる作り物を写しているらしく、江戸時代初期の『松風』の舞台をある程度反映していると考えられる。

しんばんえあわせげんじすごろく  
新版画合源氏双六 刊一舗 袋付



江戸時代末期にはさまざまな種類の双六が版行された。これもその一つで、柳亭種彦作『修紫田舎源氏』の挿絵を描いた歌川豊国の画。一卷を一コマとして主要人物を描く。振り出しは『修紫』の作中作者「麿紫の今式部」が石屋の二階で『田舎源氏』を書き綴る姿、上がりは正月風景。収納用の袋が添い、